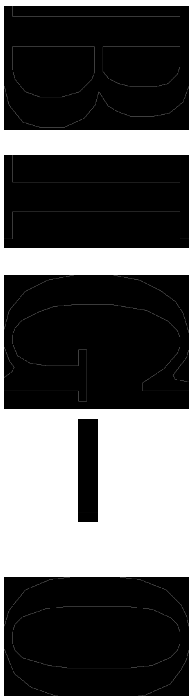


クロムガンナー



ACT:04

アンダーグラウンド・テラー

第二稿

脚本ノ小中千昭

Animation Play by Chiak J. Konaka

99ノ02ノ12

登場人物

- ロジャー・スミス(25)……………ネゴシエイター
- ノーマン・バーグ(54)……………ロジャーの執事
- R・ドロシー(18)……………アンドロイド
- ダン・ダストン(47)……………治安維持軍
- エンジェル〔今話ではパトリシア・ラヴジョイ〕(25)
- アレックス・ローズウォーター(43)……………パラダイム社主
- アジア系老婆
- ロビー・カーマイン(34)……………不動産業者〔アフリカ系〕
- マイクル・ゼーバツハ(Saebach) ……消えた新聞記者
- シュバルツバルト〔黒い森〕……………メモリー・ディガー

地下

朽ちた地下鉄線路。その奥に広がる闇。

男のモノ「——例え四十年前に起きた何かが無くとも、人という者は闇を畏れる存在であった事に変わりはない筈だ。人はその恐れから目を背け、自らの歴史の記憶すらもその存在が無かった事に振る舞っている——」

古いアパートの一室

昼間だというのに隣接するビルのお蔭で薄暗い。

安楽椅子に腰掛けたアジア系の老婆、穏やかな笑みを浮かべ、俯いてトツトツと喋る。

老婆「そりゃあ気持ち悪いもんさ。こんなにな長く生きているのに、ふつつりと前の記憶が無いんだから。あたしがここで暮らしていれば、いつかメモリーを取り戻した息子、孫でもいいさ。会いに来てくれるかもしれない、つてね」
部屋のドア近くに立っているロジャーと、若い黒人。

ロジャー「ここで暮らしていた事は、住民記録に残されず。引越されても大丈夫ですから御安心を」

フン、と鼻で嗤う黒人。ロジャー、睨み

ロジャー「期日までにきちんと振り込んでおきたまえ」

黒人「（苦笑）こつちの想定額の七倍だ。参ったぜ」

アパートの外

ビルから出てくるロジャー、不気味に見上げる。

そこは、ドームとドームの端境にあり、この天井もまた覆う工事が行われている。

黒人「ネゴシエーター」

ロジャー「——用事は済んだ筈だ」

黒人「（ニヤ）新しい仕事の話さ。おっと相手は俺じゃない。

ウチの親会社か、あんたに仕事を頼みたいらしい」

ロジャー「あんたの親会社……」

セントラル・ドーム外観

ゲートに入って来るロジャーの車。

ロジャー「(モノ)パン屋だろうが不動産業者だろうが、あるいは軍警察も同じだ。この街で親会社と言えば、それは同じところに決まっている」

ロジャー車内

ドーム内。フロント越しに見えるバベルの塔。

ロジャー「(モノ)この街は、パラダイムという企業が神であり国家——」

パラダイム本社/メインロビー

広大なホール。壁に掛けられた巨大な宗教画を見上げていたロジャー、ヒールの響く音に目を向ける。

ロジャー「!——あなたは……」

やってきたのは、エンジェル。しかし今日は地味目なスーツ姿。

エンジェル「ロジャー・スミスさん——ですね」

ロジャー「(目を細め)初対面ではない筈だが」

エンジェル「あたくしはパラダイム・プレス発行人、フィル・ガセーの秘書をしておりますパトリシア・ラヴジョイです」

エレベータ内

昇る函の中で、気まずい沈黙をしている二人。

ロジャー「——前に聞いた名はミス・ケイシー、だったか？」
黙っているエンジェル。

チン。ドアが開きかかると——、ロジャーの耳元にすつと唇を寄せて

エンジェル「エンジェル。そう呼んでつて言ったでしょ」

ロジャー「！」

ロジャーの部屋

窓の向こうにはパラダイムのドーム。
机の上に並べられた砂時計のコレクション。
掃除の為メイド風エプロンを着けたドロシー、ハタ
キを置いて、一つずつ砂時計をひっくり返していく。

エレベータ・ホール

エンジェルに伴われ部屋を出てくるロジャー。

エンジェル「つまらない依頼でがっかりした？」

ロジャー「君はいつからここで働いている」

エンジェル「一週間前よ」

ロジャー「何を狙っているんだ」

エンジェル「（微笑）狙う？ あたしはただの女だわ」

ロジャー「——」

あ、と上部階層を見上げるエンジェル。

ロジャー「？」

渡り廊下を、部下を従え歩く鋭い目をした男——。

エンジェル「（小声）アレックス・ローズウォーター」

ロジャー「あれが、パラダイムの総帥……」

地下

朽ちた地下鉄車両。何か強大な力でひしゃげている。
男のモノ——人は、過去の記憶を断ち切って生きていけるもの
だろうか。自己の立つ場所が一体いつから、どこから繋
がっているのか知らずに……」

ロジャー車内

ドーム内を走らせるロジャー。

ロジャー「(モノ) 依頼されたのは、パラダイム・プレス記者、マイクル・ゼーバッハに対し、彼が取材していた原稿を高額の退職金の引き換えにパラダイムへ引き渡させる、という交渉だった。仕事自体は難しいものではない。問題は二つ。私がパラダイムの本社に近い部門の仕事を受けていいのかという迷い。そして何より、そのジーバツクは三カ月前に姿を消してしまっているという事だ」

軍警察外観/夕刻

ダストン「(オフ) いつから探偵みたいな仕事まで引き受ける様になっただね、ミスター・ネゴシエイター」

ダストンのオフィス

不機嫌そうなロジャーを前に、愉快そうに笑い、ダストン「警察を半端に辞めた人間が行くのは二つの道しかない。私立探偵になって他人の生活を覗くか、非合法組織で他人の生活を壊すか——」

ロジャー「交渉相手の情報が欲しいだけだ」

ダストン「(ニヤ) 久々に古巣に戻ってきたんで、懐かしくなっただけさ、ロジャー・スミス」

ロジャー「——」

ダストン「(書類に目を落とす) マイクル・ゼーバッハ、ドイツ人か……? 搜索願いは出ていない。税金は二カ月末納」

ロジャー「——この街にはもういないのか……」

ダストン「(真顔) いや……。ドームの内側に住んでいた人間が外に出る事はあり得ない。——そういうものさ」

ロジャー「(思案) そうか……」

立ち上がるロジャー。

ダストン「ロジャー」

振り向くロジャーに、メモ紙が投げられる。

キャッチし見ると、住所の走り書き。

ダストン「(ニヤ) 消えた新聞記者、二重生活者だったらしい。」

妻と暮らす以外に、そこにアパートを借りている」

ロジャー「（戸惑う）」

ダストン「お前さんはここを嫌って出て行ったが、俺達は軍警察を誇りに思っている」

ロジャー「——この件については、礼を言う、ダストン」

出ていくロジャー。

ダストン「……」

ドーム内/夜

セントラルから外れたドーム内。古びたビル群が寂しげに明かりを点けて建つ。その明かりの一つ——

アパート廊下

古いエレベータを降りたロジャー、見回し、ある部屋のドア前に立つ。

腕時計を竜頭を操作すると——、万能解錠具が突出。ドアを開くと、そこは——

地下イメージ

男のモノ「私は新聞記者として生きてきた。真実を掘り出して記事を書く——。しかし、この街で、真実など新聞記者ごときが触れられるものではない事がよく判った。それに、本当に知らねばならない真実は、この街の誰も知ろうとしていない。私は知りたい。知らねばならない事を」
このダイアログ、シーン前後に分散して下さい。

ジーバックの部屋

狭い室内のデスク上には、散在した原稿と旧式タイプライター。その前に立って、書きかけの原稿（こままでのモノローグ）を呼んでいるロジャー。

ロジャー「知らねばならない事——」

と——、ロジャーの背後、ドアの下の隙間から、すっと細いものが伸びて来る。

ロジャー、小さく鼻を鳴らし、警戒——。

ロジャー「——ガソリン……？」

ボツ！ 突如、床から炎が沸き上がる。

顔を覆い、ドアに向かうロジャー。しかし、鍵が外から掛けられ開かない。

無数の原稿紙に火がついて舞い上がる。

ロジャー、窓の方を見る。薄く開いた窓——。

ビルの壁

窓を割り飛び出すロジャー、危うく転落しそうになるが、雨樋につかまる。

ロジャー「くうっ」

渾身の力で躰を揺らし——、非常階段に飛び移る。

窓から炎がチラチラと見え、煙が立ち昇っている。

遠くから消防車のサイレン。

ロジャー「参ったな……」

と！ 遠くから男の声が響く。

男の声「この街に飼われた腐った犬よ！」

ロジャー「！（振り向く）」

こちらのビルの屋上に男の影。

ロジャー「——マイクル・ゼーバッハか？」

顔も手も包帯で包まれた男——。

男 「マイクル・ゼーバッハはもうこの世から消えた。飼い主にはそう伝えたまえ！」

ロジャー、非常階段を駆け上がり——

屋上

向こうの屋上に立つ包帯の男と対峙するロジャー！。

ロジャー「では、君の名前は何だ？」

男 「シュバルツバルト、とでもしておこうか」

ロジャー「黒い、森……？」

シュバルツバルト「飼い主に報告するがいい。もう心配せずとも

哀れな新聞記者は二度とこの街には現れないと」

解けた包帯の端を翻し——、サツと闇へ姿を消す男。

高まるサイレンの音。

ロジャー「……」

ロジャーの居間

夜の冷たい風が吹くテラスに思案顔で立つロジャー。
既にドーム・シテイは平穏を取り戻し、ビルの窓明
かりが煌煌と煌めいている。

ロジャー「真実を——掘り起こす……」

すつと隣に来るドロシー。

ドロシー「寒くないの？」

ロジャー「ほう？ 私の健康を気づかってくれるのか」

ドロシー「別に」

ふいつと、部屋へ戻ってしまうドロシー。

ロジャー「アンドロイドも、メガデウスも、この世界には予め存
在する。人はそれに何ら疑問を抱かない。しかしそれは、
そうであると思っただけではないのか……？」

ソファに座ったドロシー、どこか不安気な顔。心細
そうに両腕で自己を抱く。

ロジャー「ドロシー——、君は、自分がどうして動いているのか
考えた事があるか」

ドロシー「——あなたよりは自分の事は考えているわ」

ロジャー「（モノ）そう。これは自分の事だ。自分の中の闇に向
かわなくてはならない時が来たらしい……」

ビッグオー格納庫／最下層

ギ。鉄扉を開き、ロジャー、出てくる。

今は冷たい巨像でしかない、ビッグオーを見上げた。

スライダー・スロープ

ンゴンゴンゴン……。ビッグオー用スライダーで地下へ下っていく、軽装スーツのロジャー。

旧地下鉄路線

そこに立つロジャー。

歪んだ線路は、奥の闇へと続く。

ロジャー「(モノ) ビッグオーを移送する為に、私はこの地下のトンネルを利用している。かつて、ここにはサブウェイというトランスポーターが施設されていたらしい」

手にした大型マグライトを点けるロジャー。

ロジャー「(モノ) たかだか三十フィート程度の地面の下であっても、ここに来たがる者は、銀行襲撃犯ですらない」
固い顔で歩きだす。壁にはくすんだグラフィティ。

ロジャー「(モノ) ビッグイヤーが言つた事がある。四十年前、人はこの地下にも住んでいた事があるらしいと」

縦孔前

ロジャー、マンホール程の大きさの孔の前に立つ。

ロジャー「(モノ) ここから下へは、私も降りた事が無い。恐らく、この街の誰もが知らない世界だ。ただ一人を除いて」

縦穴内

非常用の出口らしい。冷たい鉄を掴みながら一歩づつ下る。徐々に脂汗が額に滲んできた。

ロジャー「(モノ) 深く行くに従って、壁が新しいものになってきている。深い方が新しい時代のものが埋められている」

地下回廊

降り立つロジャー。啞然と見回す。

マグライトに照らされるそこは、青白い新建築材で
囲まれた冷たい空洞。

高い天井のトンネルが、遙か先にまで伸びている。
白い息を漏らすロジャー。ここの気温はかなり低い。

ロジャー「（モノ）脅えているのだ。この私が、脅えている。こ
の謂われの無い感情を喚起させるものは何だ……」

歩きだそうとして、マグライトを落とす。

闇に包まれるロジャー——、瞳孔が開き、歯をカチ
カチと鳴らしている。

両腕で自己を抱き、膝をついてしまう。

ロジャー「こ、これは生理反応でしかない！ 理性で克服出来る
筈だ！ こんな——、こんな不条理な感情——」

ロジャーの視界、歪む。

ノイズと光の奔流が、暗い闇の奥から迸る。

ロジャー「！」

それは亡霊だ。過去の人の記憶。

ゴオオオオオオオオオオ！

ロジャー「わああああああっ！」

——溶暗。

黒い森の中

風がロジャーの頬を撫でた。

薄目を開くロジャー！

木漏れ日すら差さない、濃い色の葉の木々が鬱蒼と
する森——。鳥の啼く声が響く。

ロジャー「う、ん……？」

そのロジャーは、誰かの膝に抱かれていた。
顔をずらし、誰かを見ようとするロジャー！

陰になつて見えないが——、それはまるで——

地下回廊

ロジャーを介抱していたのは——R・ドロシー。
スカートはどこかで引っかけたのか破れ、ストッキングは伝線している。

ロジャー「——マ……」
ドロシー「ま？」

徐々に、事態を把握していくロジャー。
がばっ。

ロジャー「あっ、あっ、R・ドロシー！」

ドロシー「ま、ってマザー？ お母さんの事？」

ロジャー「そんな事はどうだっていいだろう君なんて関係ない！
そうじゃあなくって！ なっ、なんでここにいるの？」

ドロシー「お留守番してなさいとは言われてないわ」

ロジャー「仕事について来ていいとも言っていない」

ドロシー「——ロジャーの生理反応、正常に戻っている」

ロジャー「え……？」

見回すロジャー。

真っ暗ではない。通路のサブ照明システムが作動し、
間接光がぼうっと回廊を照らしている。

ドロシー、ロジャーを置いて歩きだす。

ロジャー「（後を追ってきて）ドロシー、君も知りたいのか」

ドロシー「……」

ロジャー「恐怖なんて感情を持たない君が——」

ドロシー「あなたたちの気持ちはあたしには判らない。でも——」

ロジャー「——」

ドロシー「あたしがどうして動いて、考えているのか——。それ

はお父様でも知らない事だったわ」

ロジャー「ウエインライト、か……」

二話フラッシュ

地下回廊

歩くロジャーとドロシー。

ロジャー「ウェインライト博士は、アンドロイド研究の第一人者だった」

ドロシー「職人よ、お父様は」

ロジャー「——なら、最高の腕を持った、職人だな」

ドロシー「——コア・テクノロジーを全て理解してはいなかった。お父様は、死んだ自分の本当の娘を再現する為に、あたしを組み上げただけ」

ロジャー「全てを知っている人間など、この世界にはいない。しかしだ。何かが自分を脅えさせているとすれば、それに目を背け者もいるし、それを見極める事で克服しようという人間だっている。人間は同じじゃない。一人一人違う存在なんだよ、R・ドロシー」

ドロシー「——音……」

ロジャー「どうした……？」

回廊の分岐の一つの奥から、鈍い音が響いている。

神殿

広大な空間。通路の果にあったのは、モダンな建築物が並ぶ、ミニチュアの街——の様に見える。

ロジャー「何だったんだ、ここは……」

ドロシーの目が、小刻みに揺れているのだが、ロジャーは気づいていない。

ホール全体を、低い振動音が包んでいる。

見回していたロジャー、ミニチュアの建物の向こうに、崩れた一角があるのを見る。

ロジャー「——あそこらしい。行こう、ドロシー」

歩きだすロジャー。

しかしドロシーは動かない。

回り込んできたロジャーが見たものは——

ロジャー「!?」

そこには、半分地に埋まった、巨大なロボットの朽ちた姿があった。朽ちた後に、その周囲のものは作

られているらしい。

近づきながら

ロジャー「メガ——デウス……？」

響くシュバルツバルトの声

シュバルツバルト「（オフ）ここまでよく来れたものだ、パラダイムの犬にしては大したものだ」

キツと見回すロジャー。

ミニチュアのビルの上に立つ、全身包帯の男。

ロジャー「ここで何をしている？　ゼーバツハ、いや、シュバルツバルト！」

くすくすと笑っているシュバルツバルト。

ぶーん……。一際音が高まる。

それは、朽ちている様に見える巨大ロボットの胸部から漏れている。

振り向くロジャー。

ロジャー「（呟く）ビッグオーの——、アーキタイプなのか？　シュバルツバルト「四十年前、何かが起こって我々は記憶を失っ

た。それまでどれだけの力を、人が持っていたのかも」

ロジャー「——これが、力だというのか」

シュバルツバルト「メガデウスは、特別なものじゃなかったのだよ、ネゴシエーター。この私だって、メモリーさえ取り戻せば、この力を手に入れる事が出来るんだ」

いつの間にか、ロジャーと巨人の間に立っているシュバルツバルト。

ロジャー「——これは、まだ動くのか……？」

シュバルツバルト「ここに埋められていたんだ。私はそのロックを解除した。おかげでこんな姿になってしまった」

包帯の奥には、焼けた膚が僅かに見える。

シュバルツバルト「あの時、君も同じ姿になってくれていれば良かったんだがね（ニヤ）」

鼻を鳴らしハツとなるロジャー。足元を見ると——、

白い紐がぐるぐるとロジャーを囲んでいた。

シュバルツバルト、片手で紙マッチを擦る。

シュボツ！

ロジャー「くっ！（ハッ）ドロシー！」

憑かれた様な顔のドロシー、危うげな足取りで巨人の方に向かって歩いている。

シュバルツバルト「何だこの女は……？ アンドロイド？」

ドロシー「（譫言の様な機械語）」

ロジャー「ドロシイイ！」

ぶーん、ぶーん……。振動音が高まり、巨人の胸がぼつつと光始める。

シュバルツバルト「ど、どうして……」

ドロシー、激しく震えながら、凄まじい早口で譫言を言い続け――

ドロシー「――きゃあああああああ！」

マッチを落とすシュバルツバルト――。

ダツシュするロジャー。

燃え上がる地面。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

地が揺れ――、巨人像が動きだした！

シュバルツバルト「何が起こった。何故これが動きだした。」

後退るシュバルツ――、その包帯の端に炎が引火。

シュバルツバルト「ぎゃああああ！」

ドロシーの躰を抱くロジャー！

ロジャー「どうしたんだドロシー！」

ドロシー「あれは――、生きてるわ……。あたしの、情報を――」

遺跡ロボット、生ける屍が墓場から蘇る様に地よりその姿を露に。

ロジャー「（時計に）ビッグオー！」

ロジャー・ビルノビッグオー格納庫

ブン！ ビッグオーの目が光り――

ガコン！ スライダーで降りていく。

神殿

半分崩れた肢体の遺跡ロボットが、ついにその姿を
全て露わにした。

ロボット「がぎ、がごごご」

頭部を回転させ、見渡している。

ロジャー「あいつはドロシーを狙っているらしいな。（時計に）

ノーマン！ 未だか」

ロジャー邸ノキッチン

壁掛け電話に向かっているノーマン。

ノーマン「（呑気に）もう少々お待ち下さいませ、ロジャー様」

地下鉄路線

ビッグオー輸送貨車が疾走する！

神殿

ズズーン！ ズズーン！ ミニチュアのビルを踏み
倒し、遺跡ロボットがロジャーとドロシーを追う。

ドロシー「（絶叫）違う！ 違うわ！ あれはあたしの——あた
しの仲間なんかじゃない！ どこから来たのかも全然判
らない！ あれは、あれはいてはいけないものよ！」

ロジャー「くそっ！」

遺跡ロボットの巨大な腕が、二人の直前に振り下ろ
され——

ロジャー「！」

ドオオオオオオオオン！

突如、天井が割れ、ビッグオーが転落してきた！

やや離れた場所の暗がりにはいたシュバルツバルト。
包帯が焼け落ち、陰の中で醜い膚がチラリと見える。
シュバルツバルト「メガデウス……。そうか——、あいつが……」

ビッグオーノコクピット

乗り込んで来るロジャー。

コクピットの下部床で、うずくまっているドロシー。

ドロシー「（呟く）違う……。絶対に……。違う……」

ロジャー「ドロシー！ 君は怖さなんて感じる必要がないんだ！」
ドロシー「……」

球面モニタに映るノーマン。

ノーマン「大変お待たせいたしました、ロジャー様」

ロジャー「（ニヤ）サブウェイの下にまで行く事があるとは思っていなかったからな。（真顔になり）亡霊を倒すつぐぐつ、とレバーを引く。」

神殿

遺跡ロボット「ぐげええええ！」

奇怪な声を上げ、ビッグオーに襲いかかるロボット。
腕で払うビッグオー！

巨人同士の闘い。

ガン！ ガン！

ビッグオーの拳が喰り、連打された遺跡ロボット、
ミニチュア・ビル群をなぎ倒して崩れる。

ビッグオーノコクピット

ロジャー「お前が何者で、いつから、どこからここに来ているのから知らないが、少なくとも神ではあるまい」

ズズーン！ 揺れるコクピット。

ロジャー「何ッ!?」

神殿

遺跡ロボット、不気味にも脚を延ばし、ビッグオーの脚部を掴んでいた。
そのまま転倒させる！
ドドオオオンン！

シュバルツバルト「（力なく笑い）メガデウスよりも強い……」

起き上がった遺跡ロボット、両手両足を延ばし、ビッグオーを地面へめり込ませていく。

ビッグオー／コクピット

転倒しているコクピット内。壁だったところに落ちているドロシーは脅えている。

ドロシー「嫌よ——、嫌……」

ロジャー「ドロシー、よく見ていたまえ。あれは君とは無関係な化け物だ！」

ロジャー、操作パネルの蓋をガツンと叩く。

と、ボタンがずらりと並んだ隠しパネルが開く。

ロジャー「ビッグオー！ お前の仲間でもないぞ！ 遠慮する事は、ない！」

バン！ 一気にボタンを全押しするロジャー！

神殿

ガイイイイン！ ビッグオーの胸部が開いた！
それを見た遺跡ロボット、そこ目掛けて喰い付こうと迫る！

バシユ！ バシユバシユバシユバシユ！

ビッグオー胸部からミサイルが連続発射！

ビシビシと遺跡ロボットの躰に食い込むミサイル。

その刹那に、渾身の力で自己を留めていた遺跡ロボ

ツトの手足を粉碎、離脱！
デイレイ・タイムが終わり——、
爆発！！

ドーム内／メインストリート

疎らな車の往来があるメインストリート、その中央
が突如陥没！

ドオオオオオン！

地下より吹き出す煙。

ドーム内が煙で満たされていく——。

セントラル・ドーム／パラダイム本社／アレックスの部屋

離れたドームの惨事を、見下ろしているアレックス。
アレックス「——確かに、優秀なネゴシエイターらしい……」

ドーム群俯瞰

外れのドームの一つが、煙で不透明になっている。

ロジャー邸／テラス／夜

復旧したドームの明かりを見つめている、ドロシー。
と、背後から

ロジャー「寒くないか——」

ドロシー「（黙って横目で睨む）」

ロジャー「と聞くのは、挨拶の様なものだ……（後悔）」

ドロシー「気温検知くらい、出来るわ、あたしだって」

ぷいっ、と部屋に入っていくドロシー。

ロジャー「——扱いづらいアンドロイドだ……」

ドロシー、砂時計の一つを、ひっくり返した。

以下次回